



長薬同窓会の皆様へ

長崎大学薬学部長 まつ むら よし ひろ
松 村 功 啓

長薬同窓会の皆様におかれましては益々御健勝のこととお慶び申し上げます。

本年4月に学部長の職を拝命いたしました。この半年間に様々な重要な課題に直面しこの職責の重さをひしひしと感じておりますが、歴史ある本学部がより発展するよう微力ながら努力いたす所存でありますので、よろしく願い申し上げます。

さて、本学部は、現在、大きな二つの重要課題を抱えております。第1の課題は、薬学6年制の件であります。御承知のことと存じますが、平成18年度から薬学6年制の実施が決定し、全国の国立大学のすべてが6年制及び4年制を併置する2学科制をとります。それぞれの6年制と4年制の定員比率は8人：72人（東大）、20人：60人（東北大）、30人：50人（京大、北大、九大）など大学によって異なっており、本学部は薬学科（定員40人）と薬科学科（定員40人）を持つことになりました。本学部のこの比率は、薬剤師養成と研究者養成を等しく行うというこれまでの本学部の基本方針、高校生の意識調査、製薬企業へのアンケート調査等の結果に基づいて決定しました。結果として、これまでの全国の薬学系大学の定員合計総数1,480人（4年制のみ）から6年制706人、4年制774人という定員になります。一方、私立大学においては6年制のみの私立大学と2学科制の私立大学が混在しております。この薬学6年制の制度目標に向けて順調に進むための準備をすることが、現在の最重要課題です。

何故ならば、6年制に相応しい新しいカリキュラムとして5年次に6ヶ月の長期実務実習が課されますが、薬剤師免許を持たない学生が患者と接する実習を行っていいのか否かの問題があります。この問題をクリアするために、共用試験と呼ばれる仮免許制度が考えられており、これは2種類の試験から成り立っています。即ち、知識を問う試

験（CBT—Computer Based Testing）と技能・態度を問う試験（OSCE—Objective Structured Clinical Examination）であり、CBTについてはそのシステムを構築しなければなりません。またOSCEについてはこれに合格するための事前実習施設である模擬薬局を設置する必要があります。特に予算面では新たに措置されるというわけではなく、本学の経営努力の中で解決していくこととなりますが、この問題を早急にきちんと処理して、豊かな人間性、高い倫理観、医療人としての教養、コミュニケーション能力、問題解決能力等の実践力を持った高資質の薬剤師を養成するシステムを確立したいと思っております。

第2の課題は、学部6年制以外の薬学部の将来構想の件です。平成16年度からの国立大学法人化以来、大学を取り巻く環境は大きく変化しはじめており、外部資金の獲得、研究実績、大学院定員の充足等が個人評価、学部評価の基準となってきました。現在、薬学部の教員は薬学部所属ではなく医歯薬学総合研究科に所属しており、基本的には医歯薬学総合研究科長が責任者となっておりますが、実質的には医歯薬学総合研究科を構成している薬学部（薬学系）、医学部（医学系）、歯学部（歯学系）のそれぞれの学部が責任を問われます。

薬学部（薬学系）としては、研究・教育の国際化、創薬研究・教育センター構想の実現化、また、平成22年度には、6年制の上に新たな博士課程（専攻）の設置、4年制の上にある博士前期課程及び博士後期課程の改組を行うこととなります。

新教育制度移行後の平成18年度以降に学部4年制を存続させるのも、高資質の薬剤師養成だけでなく、研究者・技術者養成も薬学部（薬学系）の使命と考えているからであります。なお、この4年制については、6年制と併せて学内外のより一

層の御理解を得るべく、高校生、高校及び予備校の先生を対象として、薬学部教員による説明会を開催するとともに、九州一円の高校への訪問などを通じて、現在、広報活動に努めているところであります。

次いで、この4月以降の人事異動、組織変更について御報告いたします。

まず、第1課題の薬学6年制に関連して実務家教員4人（薬剤師として5年以上の実務経験のある者）の配置が法的に必要となります。薬学6年制を文部科学省に申請した今夏には、少なくとも2人の実務家教員を配置することが条件でありましたので、放射線生物学研究室を新しく病院薬学研究室として衣替えし、中嶋幹郎教授(昭57)、大脇裕一講師（平8）が本年8月1日付けで着任い

たしました。放射線生物学研究室は助教授だけの研究室として平成17年度まで存続しますが、それ以降は廃止されます。

その他の人事としては、本年10月1日付けで医歯薬学総合研究科附属薬用植物園の北村美江助手(昭50)が環境科学部教授として転任されました。このように毎年人事異動がありますが、大学の研究・教育の活性化にはこれは非常に望ましいことであり、今後も益々活発な人事異動があることを期待しております。

長薬同窓会の皆様には、このような大学の現状を御理解いただき、薬学部が今後さらに発展するよう、これまでと変わらず御支援・御高配を賜りますようお願い申し上げます。

